様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：５５５０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７４１

研究課題名（和文）コミュニケーション能力向上を重視した海事英語教育プログラムに関する研究

研究課題名（英文）Research on maritime English training program for improving communicative competence

研究代表者
杉本　昌弘（SUGIMOTO, Masahiro）

大島商船高等専門学校・その他の部局・助教

研究者番号：１０２１６３３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円、（間接経費）　　1,050,000円

研究成果の概要（和文）：商船高等専門学校の商船学科学生を対象とした海事英語教育プログラムに，「コミュニケーション重視の取組み」，「内容重視の指導」および「統合学習」の３つの手法を取り入れ，学生の実践的海事英語コミュニケーション能力の向上を効果的に図るための学習方法および評価方法を確立させることが出来た。
とりわけ「海事英語授業」、「e-ラーニングによる自己学習」、および「タスク活動」という３つの異なる学習形態を体系的に統合した、いわゆるBlended learning方式の海事英語教育プログラムを確立することが出来たことが本研究の特色といえる。

研究成果の概要（英文）：Learning and evaluation methods for improving practical maritime English communication competence was developed for the students in the Shipping Technology Departments at the National College of Maritime Technology by introducing "Communicative competence", "Content-based-instruction", and "Blended learning" to the maritime English training program.
In particular, the maritime English training program developed through this research project was unique in blending the three different learning activities, such as "maritime English classes", "self-learning with e-learning contents", and "task-based activities".

研究分野：海事英語

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：海事英語　コミュニケーション能力

１．研究開始当初の背景

(1) 商船高等専門学校（以下、商船高専）の商船学科学生の多くは、卒業後、外航海運会社をはじめ海事関連の産業へ就職している。英語が使用言語とされる外航商船のみならず、国際化の進んだ海事産業においては、実践的な英語コミュニケーション能力は必要不可欠となっており、商船高専の英語教育に対しても実践的な会話能力向上の要求が高まっている。大島商船高専を含む全国５商船高専では、「英語による乗船実習」など学生の実践的海事英語コミュニケーション能力向上のための取組みを始めたところであるが、英語教育を専門としない航海系、機関系の教員が海事英語教育を担当しているケースがほとんどであり、教授方法、視聴覚教材、評価方法などカリキュラムに関して十分な教育体制が確立されているとはいえない。国際的には、国際海事英語会議（International Maritime English Conference: IMEC）を中心として海事英語教育手法の研究、調査、実践が行われているが、国内に目を転じてみると、これらは一部の海事系大学にて行われているのみであり、商船高専では海事英語教育に関する十分な研究がなされていない。

(2) 本研究代表者は、これまでに「英語による乗船実習」の実践場面に必要な海事語彙、フレーズをまとめた本「はじめての船上英会話」を執筆し、併せてこれらを学習するための e-ラーニング教材やロールプレイ演習教材の試作を行った。これらを基に学習教材の充実を図るとともに、教材を使用した効果的な学習方法、評価方法を含めたカリキュラム全体の検討が必要と感じ、今回の研究の着想に至った。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、商船高専の商船学科学生を対象とした海事英語教育プログラムに、コミュニケーション重視の取組み（Communicative Approach）、内容重視の指導（Content-based Instruction）、統合学習（Blended Learning）の３つの手法を取り入れ、学生の実践的海事英語コミュニケーション能力の向上を効果的に図るための学習方法および評価方法を確立させることである。

(2) 本研究では、これまで個別に行ってきた「海事英語授業（航海英語、機関英語）」、「e-ラーニングによる自己学習」、および「タスク活動（英語による乗船実習、ロールプレイ演習）」という３つの異なる学習形態を体系的に統合した海事英語教育プログラムの開発を行う。
この際、各学習形態には海事分野の題材内容に一貫性を持たせ、コミュニケーション能力に重点を措いたカリキュラムの検討並びに視聴覚学習教材の開発を行う。
学習プログラムには、「タスク活動」を行った学生が、基礎となる語彙、フレーズ学習の重要性に気づき、学習効果を向上させるフィードバック効果を持たせる。
また、学生評価およびカリキュラム評価のための「海事英語能力テスト」を作成、実施し、学習プログラムの継続的な改善が行えるようにする。

３．研究の方法

(1) 研究初年度は、「海事英語授業（航海英語、機関英語）」、「e-ラーニングによる自己学習」および「タスク活動（英語による乗船実習、ロールプレイ演習）」の 3 つの学習形態を統合した海事英語カリキュラムを作成した。また、作成したカリキュラムにしたがい、詳細シラバス、教材（e-ラーニング教材、ロールプレイ演習教材など）を作成し、e-ラーニング教材、ロールプレイ演習などを弓削、広島、大島の各商船高専にて試行した。

(2) 研究次年度は、初年度に引き続き、海事英語カリキュラムにしたがい、詳細シラバス、教材（e-ラーニング教材、ロールプレイ演習教材など）を作成し、e-ラーニング教材、ロールプレイ演習などを弓削、広島、大島の各商船高専にて試行した。試行結果および連携研究者からのフィードバックをもとに、教材の改良を行った。

(3) 研究最終年度は、海事英語カリキュラムにしたがい、海事語彙、フレーズに関する海事英語能力テストを作成し、大島商船高専にて試行した。試行結果をうけ、テストの改良を行った。また、研究期間を通じて作成した教材（e-ラーニング教材、ロールプレイ演習教材など）をまとめ、海事英語学習教科書「はじめての船上英会話　二訂版」を出版した。

４．研究成果

(1) 本研究を通じて、海事英語教育プログラムに、コミュニケーション重視の取組み（Communicative Approach）、内容重視の指導（Content-based Instruction）、統合学習（Blended Learning）の３つの手法を取り入れ、学生の実践的海事英語コミュニケーション能力の向上を効果的に図るための学習方法を確立することができた。

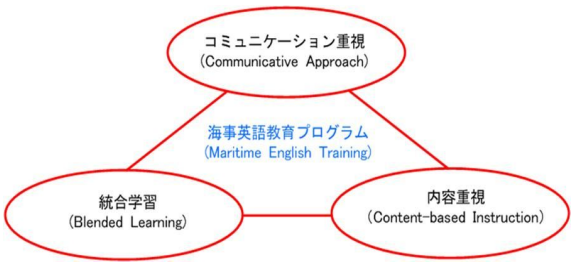

図１ 海事英語教育プログラムに用いる手法

また、「海事英語授業」、「e-ラーニングによる自己学習」、および「タスク活動」という３つの異なる学習形態を体系的に統合した、いわゆる Blended learning 方式の海事英語教育プログラムを確立することが出来た。
この際、各学習形態には海事分野の題材内容に一貫性を持たせた「内容重視の取組み」を実践することができた。

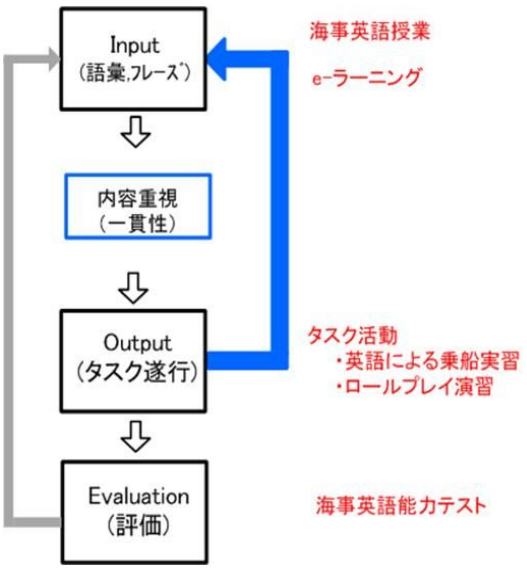

図 2 内容重視の統合学習法

(2) 学生評価およびカリキュラム評価のための「海事英語能力テスト」に関しては、評価の対象が海事語彙およびコミュニケーションフレーズの習得に限定されたテストとなった。語彙、読解、文法テストに加え、リスニングおよびスピーキングテストを通じて実践的海事英語コミュニケーション能力を包括的に測定する「海事英語能力テスト」の開発を、今後も引き続き行っていきたい。

(3) 本研究の対象となる海事英語能力とは、基本的な海事用語の語彙力および出入港、航海当直等の場面で用いる実践的英語コミュニケーション力である。これらは、商船高専の学生が座学課程修了後に受ける１年間の長期航海実習において必要とされる英語力である。長期実習を実施する航海訓練所も、商船学科学生の座学課程修了時における実践的英語の運用力を求めている。海事英語教育プログラムにより基礎的な海事英語能力を身につけて長期航海実習に進むことで、英語コミュニケーション能力のさらなる向上が期待されるのみならず、航海、機関それぞれの専門分野における訓練効果も上がるものと思われる。

(4) また、本研究で取り上げる海事語彙およびコミュニケーションフレーズは、学生が卒業後に外航船に乗り組んだ際にも基礎となるものであり、外国人船員とともに船舶運航に当たる際には必要不可欠なものである。実践的な海事英語コミュニケーション能力を有して外航船舶に乗船することにより、外国人船員および他船との間で正確な情報の交換、共有が可能となり、船舶の安全運航、事故防止に寄与するものとなる。本研究の成果は、個々の学生の英語能力向上にとどまらず、国際化の進む日本の海運、海事関連産業全体のレベルアップに貢献するものと思われる。

(5) 本研究において開発した海事語彙およびコミュニケーションフレーズに関する「海事英語能力テスト」は、商船高専の学生のみならず、ホームページなどを介して他の海事教育機関の学生、さらに外航海運に乗船する船舶職員の実践的英語能力の測定にも使用されることが期待できる。

(6) 研究成果として作成された、e-ラーニング教材、ロールプレイ演習教材などは、海事英学習教科書「はじめての船上英会話　二訂版」にまとめられた。これらは商船高専の学生のみならず、広く全国の海事教育機関学生、海事教育訓練担当者および現役船舶職員にも利用可能な教育、学習ソースとして使用されることが期待される。

(7) 海事英語という専門英語の分野においては、専門科目教員と英語教員の連携（twinning）が重要とされ、IMO のモデルコース 3.17(Maritime English)でも推奨されているが、国内ではほとんど実施されていなかったのが現状である。専門科目教員である研究代表者と英語教員である研究分担者の twinning により、海事英語という専門英語のカリキュラム作成、実施か行われたことは本研究の大きな成果といえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
杉本昌弘、海技試験英語問題のコーパス分析、大島商船高等専門学校　紀要第 44 号、査読有り、2011 年、pp.1-5

〔学会発表〕（計１件）
SUGIMOTO 、 Masahiro 、 Training on closed-loop communication with a main engine stand-by sequencer、MARSIM 2012 Proceedings、2012.4.26、Singapore Maritime Academy、 Singapore

〔図書〕（計１件）
商船高専海事英語研究会、はじめての船上英会話二訂版、海文堂出版、2014 年、192 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

杉本　昌弘（SUGIMOTO、 Masahiro）
大島商船高等専門学校・商船学科・助教
研究者番号：10216335

(2)研究分担者

吉留　文男（YOSHIDOME、 Fumio）
大島商船高等専門学校・一般科目・教授
研究者番号： 60342557

(3)連携研究者

清田　耕司（SEIDA、 Koji）
広島商船高等専門学校・商船学科・准教授
研究者番号：50216503

松永　直也（MATSUNAGA、 Naoya）
弓削商船高等専門学校・商船学科・准教授
研究者番号：10270357